



卓 話



「最近の囲碁の国際事情」

女流囲碁士 小林 千寿氏

この20年間くらいの間に世界の囲碁事情は大きく躍進しました。その大きな理由の一つは、400年の歴史を持つ日本のプロ囲碁界に、中国、韓国が追いつけ追い越せで、今や国際戦で日本が勝つとニュースになる程になってしまいました。



元々、碁は3~4000年前に中国大陸で生まれたらしく、まず韓国に広まり、3、4世紀頃に日本に伝わったと考えられています。日本国内で一番古くて有名な盤石は（5年に1回程展示されています）、聖武天皇の螺鈿作りの装飾が美しい、正倉院に収められているものです。

中国や韓国では碁の愛好者はいつの時代にもいましたが、内戦が多かった為に日本のような『専門棋士』は制度的に作れませんでした。

それが経済的発展により、スポーツ、文化面にも国家政策として力を入れるようになり、囲碁のプロ棋士も急速に力を付けてきました。それに刺激されて韓国も国家の名誉を懸けて急速に強化してきました。そして台湾も日本に追随してきています。それまで日本は世界中に競争相手が無く、江戸時代に出来た『文化的な囲碁』を守ってきていました。日本は長い歴史がある故に、新しい中国の『マインド・スポーツ』的な、今の世界的な碁の流れに身を置く事に遅れを取っているのが現状かと思われまます。その流れは世界の囲碁界にも当然、影響を与え始めました。

又、それは偶然にも日本マンガブームで世界に翻訳された『ヒカルの碁』で急増した、世界の若者の囲碁ブームと時を同じくしています。マンガを通じて急速に碁に興味を持った世界の若者達は、インターネットで対局をしながら、あっという間に何年も碁を打っている先輩達を追い越して、次の指導者を求めました。又中国や韓国では日本を負かし、栄

誉的で賞金も高い『囲碁のプロ棋士』を目指す子供達が急増しましたが、トップに躍り出られるのは選ばれた人達だけですので、碁の修行をしたが行き場の無い若者達も出てきました。

この欧米の日本マンガ・ブームについてお話したいと思います。

私は1974年から世界の囲碁普及に力を注いでいますが、この10年程での欧米の囲碁人口の急増、レベルアップは素晴らしく、私自身も2004年~2010年の間、欧州に居を移して本格的に碁の指導をしておりました。その間、文化庁の『文化交流大使』を2度任命を受けて、フランス、ドイツ、オーストリア、スイスを中心に、若者達に碁を教えておりました。2004年に居をスイス・ジュネーブに移した時は、まだ日本のマンガブーム熱の凄さを知らなかったのですが、ジュネーブはフランス語圏でしたので、日本マンガブームが最初に起きたフランスの影響を受けていました。丁度、スイスで初めての日本マンガ・フェスティバルを企画している青年と日本総領事館の日本文化月間準備委員会で出会い、日本マンガだけでなく、日本文化も一緒に紹介したいという意向に協賛して、フェスティバルのイベントの中に碁のブースを作って指導しました。それからの2年半は驚きの日々でした。そして最初に持った疑問は『何故、これ程世界の若者達が日本マンガを面白がるのだろうか?』でした。

ジュネーブは国際都市である為にインターナショナル・スクールが多く、スイスの住人の40%は外国籍だと言われています。そこで出会う日本マンガから日本文化に熱い視線を持つ若者達は、東洋諸国は勿論、欧米諸国だけでなく、中東諸国にも及んでいることが分かりました。驚いた事に戦況下のイスラエルでは、テレビで『ヒカルの碁』が放映されました。（現在イスラエル人の10代の強いプレイヤーが出てきています）

その状況を見て、当初2、3年で帰国する予定だった私は『今、この時に世界の若者達に碁を普及せず、いつするのだ』の思いに至り、又運良く『文化交流大使』に任命されて、日本国として『日本の文化的な碁』を広める機会を得ました。

そして、広めれば広めるほど若者達の間での囲碁熱

は広がり、棋力も伸び、とても一人では賅いきれない状況に、そこに先程お話ししました中国、韓国の元院生、低段の棋士が欧米へ進出していったのです。これは喜ばしい現象でした。そこで、需要と供給が一致したのです。

それから約5年後の2009年になると、新しい現象に気づき始めました。

それはランキング制が主流の欧米のアマチュア界での若者の台頭が、長年の間碁を打って来た大人の囲碁ファンにとって、喜ばしいが困った出来事になってきたからです。それは、ランキングは大会の成績で決まるので、若者達は大会に出ないとランキングが上がりにくいです。そこで実力より低い段級で出場するしかなく、大人はその彼らと打たされる為にランキングが下がっていくという傾向になってしまったのです。最初は苦笑いをしていた大人達も、負かされてランキングが下がる大会に出る事が徐々に楽しくなくなってきました。

日本が世界に囲碁普及をして来たのとは全く違う理由で、中国や韓国の若い先生達は欧米に移住を求めているのです。彼らは欧米の囲碁大会の賞金をさらい、若者達に『勝つ術』を教えています。

碁はゲームですから『勝つ事』が一番大切ですが、その為にマナー、精神性を捨てるような考えは、日本の『棋道』にはありません。『勝つことを生業』にしているプロ棋士ならばともかく、碁を楽しむアマチュアの世界で勝負のみに拘るといふ新しい傾向に、私はたじろぎました。

日本が100年間普及してきた『文化としての碁』を語る人が減ってきています。この事は長い目で見たら、碁の衰退になるのではないだろうか？

その危機感から2010年の夏に世界の囲碁普及場である欧州から日本に戻ることにしました。

今は日本の囲碁界の組織を通じて『日本の文化的な碁』を世界に発信する努力をする日々です。